



はい、たしかに某メジャー新聞では「私の履歴書」という人気記事があって、そのウェブサイトには「政治や経済、文化、スポーツなどの領域で大きな業績を残した人物が自らの半生を語ります。日本経済新聞朝刊の最終面で1956年から続く名物コラムです」とありますね。もちろん、ぼく自身はこうした記事に伍する人物では毛頭ないのは明白です。ですから、愛する桂枝雀の名演「代書（代書屋）」に登場する松本留五郎氏が代書屋に書いてもらうため依頼した「履歴書」ならぬ「ギレキ書」を採用したいのです。何せ「就職」のためではなく「勤める」ためであり、ギレキ書を長屋のとなりの住人に「借りに行く」という頓

珍漢ぶりで、舌がまわらないのか、初めから知らないのか「ギレキ書」なのです（笑）。

これから、自分の六十五年余りの人生を振り返ろうと無謀なことをしようとしていますが、その無謀さと自分の越し方行末のいい加減さ具合が「履歴書」ならぬ「ギレキ書」にふさわしいのではないかとあって、このタイトルにしたのです。もっとも履歴書とて、何十年か一度にしか書いたことはないで、やはりリアリティのないものなのです。

さあ、始めることにしましょうか。『夜戦と永遠：フーコー・ラカン・ルジャンドル』の佐々木中はこう言っています。「書くということは本質的に偶然性に身を曝すということである。知らぬこと、知らない筈のことを書いている自分を発見して茫然とすることである。深く自失することである」。また、1994年に刊行されたミシェル・フーコーのインタビュー、講義、論文からなる遺稿集に『Dits et écrits』があります

が、言語というものに強く関心を抱いていた彼らしく「言ったこと、書いたこと」と訳すべき著作かもしれないですね。フォーコー自身の身体が共振体となって、あらゆる言語が発せられている、そんな著作なのですね。そうしたことにあやかった「ギレキ書」でありたいと思っています。

いつから始めましょうか、いまのぼくにとってもっとも重要な古典芸能との出会いは三歳か四歳の時でしたね。母か祖母に連れられて歌舞伎座へ行ったときに観た七世尾上梅幸の演じた「藤娘」が、記憶に残る最初の歌舞伎（舞踊）でした。舞台も客電も真っ暗な空間で長唄だけが奏じられる。そして詞章が「へ花をあらわす 松の藤浪」とかかったところで、舞台灯がパッと点いて、松の大木に絡みついた舞台一面の藤の花が一気に映し出されるのです。この圧倒的な様式美に幼いぼくは思わず身を乗り出し、二階席か三階席の最前列から落ちそうになったそうです、ぼくは覚えてませんが、

思えば、それ以降観たおびただしい舞台においても、この「照明パツ」は記憶の根源にあります。蜷川幸雄の一連の作品でも、新宿梁山泊や劇団離風霊船の舞台でも、日常と非日常を峻別する裂け目としてこの照明の切り返しが機能していると思います。それがぼくの舞台体験でした。

では、少し飛びますね、本との出会いについて話しましょうか、これもぼくの生涯を通じて大きなできごとなのです。でも、記憶力の比較的よいぼくでも、「最初の一冊」は覚えてません。『人体からだ図鑑』だったかもしれませんし、『青い自動車』だったかもしれない。ただ、長く影響を与えたものは『オズの魔法使い』だったと思います。これが連作であったことや19世紀後期の金融政策に関する金銀複本位制論争のアレゴリーを含んでいることなどは知る由もありませんでした
が、ジュディ・ガーランドがドロシーを



演じた「オズの魔法使」(1939)は観ていたし、シェリーのテレビドラマ(1974)や岡崎友紀の舞台(1976)にも触れていました。こうして、何らかの作品が映画やテレビ、舞台など、さまざまな表象文化へと拡張されてゆくことは、ぼくの世界観が広がったという意味で大切なものでした。ですから、SCOTの鈴木忠志とギリシア悲劇や蜷川幸雄とシェイクスピアなどは、ひとつの作品がいろいろな作品へと「転生」するさまは心地よいのです(あの「ハムレット」「ロミオとジュリエット」の原型は、中学のときの英語劇で自分で台本を書いたり字幕を作ったり音楽を担当したのが最初でした)。

ところでこどもの頃は「勉強しろ」と言われた覚えはありませんが、「本は読むな」あるいは「本は買うな」とよく言われていました。なにせ、中学に入る前には岩波文庫、新潮文庫、旺文社文庫はすべて揃えていたからです(当時は文庫本は本当に安

かった。岩波文庫は星ひとつが50円でした)。自分の部屋はなかったので、買ってきた文庫本はキッチンにあった「お客様用」の食器などが入った戸棚におさめていました。それが見つかったから(つまりはあまりお客様は我が家には訪れなかったわけですが)「本は買うな」と言われたり、おかげで自分の部屋を作ってもらうことになったのです。

そうしてシェイクスピアに縁の深い人物が創立者である中高一貫の進学校に入りましたが、迷わず図書委員になりました。理由は、貸し出しの冊数に制限がないことと、リクエストした書籍が優先的に配架されるからでした。でも、現実にはあまり借りることなく、もっぱら館内で読んでいることが多かったですね、授業ですか、ええ、あまり出ていませんでした(笑)。歌舞伎座に行くことと図書館内に「籠城」することに忙しくて授業に出る暇はありませんでした。ある日、図書館のいつもの席で『谷崎



潤一郎全集』を傍に積んでそれを読んでいました。すると、そこに当時図書館長の橋本喜典先生が来られたのです。橋本先生は著名な歌人で、九十歳で亡くなられたのですが、彼の国語の授業は（本来の国語の先生が休講だったので）一回しか聴いたことがありませんでした。陰しい表情でやってこられた橋本先生に叱られるな、とすぐに思い身構えました。ところが、先生はぼくにお茶を持ってこられて、「谷崎は、おもしろいですか」と語りかけてくれたのです、授業中なのに（笑）。そしてひとしきり谷崎談義をされたあとに「まあ、ゆっくりしてってください」と去っていかれました。そんな中高だったのですね。とりあえず成績さえよければ、まったく文句を言われることはありませんでした。

では、時間を少し先に進めましょう。医学部時代へとシフトします。医学部では最初は解剖学を勉強していました。解剖学自体のことについては、最近出版された養老

孟司と名越康文との対談『生きる仕組み』で養老先生がかなりリアルに詳しく語り

れています。ですから、ここでは、ぼくがどうして解剖学を勉強するようになったかについて触れましょう。ご存知のように、医学は、基礎医学・臨床医学・社会医学と三分類されております。基礎医学は、解剖学や生理学、生化学、遺伝学のような医学そのものの基礎となる領域であり、ひとりの患者さんの極めて微細な構造なり機能なりを対象とする領域のことです。臨床医学は、言わずと知れた内科や外科、眼科、婦人科といった領域のことで、患者さんの身体をひとつのシステムと捉えたものであります。もっとも、耳鼻咽喉科や脳神経外科のように局所的な診療科目と、婦人科や老人内科、小児科など世代に分かれたもの、さらには精神科や内科のように、医学の存立根拠を問うようなものなどの分かれ方を





していて、それ自体興味深い問題群を含んでいるものですね。そして、第三の医学である社会医学とは、医学・医療の対象を患者を含めた特定集団にまで拡張した領域をさし、公衆衛生学や衛生学、疫学などが含まれます。のちにぼくが学ぶことになる医学史や医療人類学などもここに入ることになります。

ぼくはヒト（と生物学ではカナ書きにしますが）、つまり人間全般について知りたいという漠然とした欲望をもっていましたから、高校のときに哲学か医学かどちらに進もうかと悩んでいました。「解剖や診療をしながらでも哲学の勉強はできるが、その逆はむずかしい」という当時の担任の先生のことばを信じて、最初は生化学、次に解剖学の分野へと進みました。ですから、現在ぼくが哲学、とりわけその中でも身体論というジャンルを専門にしているのも、

あまりモチベーションは変わっていないのですね。科学は基本的に、対象の「構造と機能」について学びます。医学、とくに基礎医学の場合、構造は解剖学に、機能は生理学に相当します。医療と人文学の接点の場合は、むずかしいのですが、人類学や社会学が構造を扱い、哲学や教育学が機能を扱うことになるかも知れません。もっとも、最近は臨床哲学とか臨床教育学といった分野が出来ていますので、簡単には言えないかも知れないですね。

とにかく、ぼくはヒトの基本的な構造を学ぶために解剖学に進み、やがては人間集団のいろいろな心性や情緒、機微や美学を知るために、人類学や哲学の領域に足を踏み入れるようになるのです。そして、何よりも医学概論との出会いは大きなものでした。当時、解剖学者として生きていくことに疑問をもっていたぼくは、阪大の中之島校舎の玉砂利の道である先生とすれ違います。その人こそ、中川米造、ぼくが終生恩

師と崇め、唯一心から自然に「先生」と呼ぶことのできる方でした。その高名はぼくが医学部に進むはるか以前の高校時代から知っていましたが、この人こそ、我が国における医療人類学、医療社会学、医学教育学の草分け的存在であり、医学概論の正統な後継者であることは（中川先生が耳鼻咽喉科の出身であることと合わせて）のちに知ったことでありました。ぼくがつまらなそうな顔をしていたのでしょう、中川先生はぼくに声をかけ研究室まで連れていってくれました。「環境医学教室」、それは教室名で、大学での講座名は「集団社会医学概論」と言っておりました（ここで前述した社会医学を思いだしてください）、研究室は三つほどの広い部屋に分かれていますが、どの部屋も本がうず高く積まれており、先生も学生のその本の山の一角で「研究」をしているように見えました。中川先生に事情を話して、この研究室ではどんな「研究」をしているのかを訊ねると、「ん？ 本

を読んで、話して、論文を書いておられますな」と話されました。ぼくはこのことばを聞いて、なぜか安息の地を得たような心持ちになったので「研究室に入れてください」とすぐにお願ひしました。中川先生は「諾」の返事をされるかわりに、ご自身の頭のうしろにあった書棚から『近代医学の史的基盤』という上下二巻の分厚い本を取り出され、「じゃあ（というのが研究室に入るための条件だったのでしょう）、夏休みにこの本をノート取りながら読んでください」と言われたのです。いま考えれば無謀なことであり畏れ多いことでもあります、ぼくはこの上下2段組の一冊700頁になんなんとする大著（それは日本の医学史における記念碑的な労作であり、同時に細菌学者



川喜田愛郎の代表的な著作でもあったのです）を丹念に繙き、ノートを取りながら夏休みを過ごしました。どうやらそれは中川研に入るためのひとつの通過儀礼のようなもので、何人かの学生がそのような「夏休みの過ごし方」を命じられたようですが、それが確認されたり、それについて発表させられたりということはありませんでした。

ぼくは先ほど、中川米造先生を「医学概論の正統な後継者」と断じました。我が国の医学概論（といっても、いわゆる医学概論は我が国独自の知的な思考=試行=嗜好であって、それを単に医学哲学、philosophy of medicine とはいえず、中川先生は名刺には medical humanities と書かれてました、「医療についての人文学的なものすべて」という意味合いですね。ぼくはここにミシェル・フーコーの強い影響を感じます）の嚆矢は、昭和16年に大阪大学医学部で開講された澤瀉久敬の「医学概論」ですが、中川先生はその澤瀉の高弟であり、澤瀉先

生のあとに医学概論の講義を引き継がれました、その意味で正統な後継者なのですね。この後は中川先生が退官されてしまって、医学概論の講義も環境医学教室もうやむやになってしまいました。ぼく自身も、「医学概論」の講義をいくつかの医学部や看護学校でおこないましたが、結局打ち上げ花火的なものに終わってしまったのは残念なことであり、中川先生にも申し訳なく思っています。その後、医学史、医学概論を経て、本格的に医療人類学の研究を始めようになり、世界中を飛び回るようになります。「人間全般の研究」という本質はいつまでたっても変わりませんね。

そして京都芸術大学（当時は京都造形芸術大学）に17年勤めました。ここでは、展覧会やイベントのキュレーションをしたり、舞台芸術研究センターで歌舞伎や能楽、日本舞踊の公演のプロデュースなどを主にしておりました。そしてそれらに関係した多くの講義を担当していました。幼少



1959年東京・神楽坂に生まれる。
大阪大学大学院医学研究科博士課程満期。
提出した論文は「肩こりの医療人類学」。
海外での調査研究の後、関西医科大学附属

看護専門学校、京都芸術大学舞台芸術研究センター勤務ののちにIAMASへ。
医学部時代の解剖学から医療人類学を含めた医療、独学で進めた現象学ベースの哲学、

のときに客席から身を乗り出して観ていた歌舞伎劇への関心がようやく花開くことになるのです。三つ子の魂百まで、いつ役に立つのかわからないものですね。

その後、このIAMASにやってきて18年を経過しようとしているのですが、もう文字数も終わりに近づきました。ではふたつだけ。ぼくが専門としている身体論は、いわゆるメルロ＝ポンティがやっていたような「身体の哲学」だけをさすものではなく（彼とて、乳幼児の発達心理学をのちに加えるようになりますが）、専門的な臨床医学や舞台芸術だけを示すものではなく、それらの知的成果や歴史的経緯をふまえた大きな「身体論」を妄想しています（笑）。ですから、いつも言うように「哲学-芸術-医学のトライアングルの中心に身体をすえた」思考様式をもったものになっています。

それにもうひとつ。2024年の9月末にぼくは脳卒中（小脳出血）によって、激しいめまいと嘔吐、それに歩行困難に見舞われ、

退院した現在でも、その後遺症である立ちくらみや吐き気が常にあって、杖がなければ歩くこともできません。口の悪い教え子からは「やっと身体論の先生になれましたね」などと励ましのことをばをいただいています。病後まだ教壇に立ったことはないのですが、自分自身で開口一番どんなことを発するのか、それが楽しみです。

これが「私のギレキ書」です。

最後に、この「ギレキ書」にすばらしい文章を寄せてくださった、元同僚の入江先生、安藤先生、教え子の塚原さん、佐原くん、木ノ下くん、そして朋友の内田樹先生に深くお礼を申し上げます。みなさんの文章によって「ギレキ書」は立派な「履歴書」になったかもしれませんね。



舞踊研究や舞台芸術中心の芸術という三本の柱の中心に身体をおいたユニークな身体論を展開。
主な著作に「病い論の現在形」「『医の知』

の対話」（中川米造との対談）「伝統芸能ことはじめ」など。
好きな囃家は古今亭志ん朝、AKB48のガチオタ（推し、ではない）。